

台本

温泉えっち ―湯けむり美少女はえっちな気分になると博多弁に―

（仮題）

ヒロイン名…雫石雫穂（仮名）
しずくいししずほ

外見…黒髪ロングの女性。年齢不詳。外見は10代後半
口癖…えへへ。火照っちゃいます。素敵。

性格…のんびり。えっちはその気になると好き。温泉に
入ると身体が火照りエッチになりやすい。

雫穂 「温泉えっち ー湯けむり美少女はエツチな気分になると博多

弁にー(仮題)」

雫穂 「さーくる♪ え る ふ ろ ♪ ばい♪」

雫穂「ふわー 綺麗なお湯ー」

雫穂「床も岩だー あはは、ごつごつして痛いー」

雫穂「わー わー たくさんの温泉があるー ど、れ、か、ら入ろうかなー」

雫穂「わー 椅子も木の椅子だー 素敵ー」

雫穂「あ、お隣、失礼しますね。よいしょ！」

雫穂「はあー 素敵な温泉ですねー 入る前からうつとりしちやいますー（お湯をかける音）」

雫穂「んー 早く身体を洗って入りたいですー こんな時は長い髪が疎ましいですねー」

雫穂「ふんー♪ ふんー♪ ふんー♪ ふんー♪」

雫穂「ふんふふーん。ふーん。ふーん。ふーん♪」

雫穂「わしわしー わしわしー あわあわ あーわ あわー わしわ…きやつ！ いた！」

雫穂「いた！ 痛い！ 目にシャンプー入っちゃって いた…」

雫穂「あ… んー！ んーっ！ ふう。はあ…はあ…」

雫穂「ありがとうございますー 助かりましたー 私、普段はのん

びりしているんですが、温泉になると慌てん坊になっちゃうんですー」

雫穂「はー 本当に助かりましたー 命の恩人さんですねー」

雫穂「ん……あれ……男の人？」

雫穂「……私……もしかして……」

雫穂「間違えて男湯にはいっちゃったんでしょーかー」

雫穂「あ、混浴」

雫穂「失礼しました。またまた、慌ててしまいましたー」

雫穂「えへへ、すいませんー」

雫穂「……もしかして、お一人のところお邪魔してしまいましたー？」

雫穂「あ、はい。ありがとうございますー」

雫穂「私、早く温泉に入りたかったんですー よろしければ……一緒に、させていただきますねー」

雫穂「お兄さんー ありがとうございますー」

雫穂「お礼にー よろしければお背中お流ししましょうか？」

雫穂「はい えへへ」

雫穂「では後ろを向いてくださいー」

雫穂「ではー お兄さんのー お背中へー」

雫穂「えへへー ごしごしー ごしごしー お兄さんー背中広いー
ごしごしー」

雫穂「はー お兄さんもー 温泉好きなんですかー？ ごしごしー
ごしごしー」

雫穂「んふふー 温泉はいいですよねー ふわーつとして…：幸せ
な気持ちになっちゃってー ごしごしー ごしごしー」

雫穂「ここはー 露天風呂ー 青い空と白い雲ー とっても開放感
があつてー 素敵ですねー ごしごしー ごしごしー」

雫穂「あ、お兄さんー 耳に石けんが残ってますよー 拭き取りま
すねー 右耳からー ごしごしー ごしごしー」

雫穂「はい、左耳ー ごしごしー ごしごしー んふふー お兄さ
ん綺麗になりましたー」

雫穂「背中をもう一度ー　ごしごしー　あれ、お兄さんもしかして
肌弱いですか？　ちよっと赤くなってます」

雫穂「んー　やっぱりー　大丈夫ですか？　ヒリヒリして痛そうで
すー」

雫穂「はあー　はあー　痛かったですねー　すいません」

雫穂「はあー　はあー　ん……」

雫穂「ん……はあー　はあー　ふうー　ん？　唾つばでもつけておけば
治る？　駄目ですよー」

雫穂「ん……どうしてもって言うのなら……ちゅー」

雫穂「えへへ」

雫穂「（耳元へのささやき声）あたしのじゃ駄目ですか？　ん……」

雫穂「ん……ちゅ……ちゅ……れええ……ちゅ……ん……ちうー」

雫穂「はああ……ちゅ……ちう……ちゅちゅ……れええ……ちうー」

雫穂「ちう……ちゅう……ちう……れええちゅちゅ……ん……はあ
……」

雫穂「気持ちよか？（博多弁）　れええじつ……ちうちゆる」

雫穂「はふ……はあ……ちゅ……ちうちう……ちゅ……れええ……
ちうー」

雫穂「……あ！　ご、ごめんなばい！　いや、ごめんなさい！　ごめんなさい！」

雫穂「あうー　あたし変なことしちゃいましたねー　あうー」

雫穂「あたし……温泉にきちゃうと……変なテンションになっちゃって……あうー」

雫穂「え？　あ、方言で話しとった？（博多弁）　あ……また」

雫穂「私……興奮すると……その方言出ちゃうんです」

雫穂「うー　都会の洗練されたレディーをー　目指しているんですがー」

雫穂「うまくいかないですねー」

雫穂「あ、本当に……すみません……」

お兄さん「お返しに背中を流してあげる」

雫穂「え？　あ……でも……えっと……じゃあ……」

雫穂「お背中お願いしますー」

雫穂「はあ……背中……はい……ありがとうございます……」

雫穂「はあ……」

雫穂「ここのシャワー……とっても気持ちいいですねー　あんまり

きつくなくて……」

雫穂「ん……はあ…… お兄さん……背中……タオル気持ちいいです……はあ……」

雫穂「ん……はあ……ふう…… ん…… ふう…… あ。お兄さん上手、あ」

雫穂「ふう……風がなびいてますね…… 火照^{ほて}った身体に……とても、とっても気持ちがいいです……はあ……」

雫穂「ん……はい、寒くないです……はい……はあ……ふう……ん……はあ……」

雫穂「ん？ 背中赤いですか？ ふう……火照^{ほて}ってしまったているので……いえ肌が弱い訳では……ひゃん！」

雫穂「は！ ん！ んふ！ はああああ…… あ、いえ……確か……あは……は……肌が弱かかもしれま、しえん！（博多弁）くうん！ ん！」

雫穂「はふ……あ……ん！ あ……は……はい……大丈夫ばい……ん……はふ……はあ……」

雫穂「あ……はあ！ あ……舌がひん！」

雫穂「あ！ は！ 首筋……も！ あはあ…… あう！」

雫穂「ひゃん！ はふ！ あ……あ……お尻ん……割れ目ん上までひゃん！ は！ は！ は！」

雫穂「はい……満遍のう綺麗にあ……は……はふ……ぱり優しか……
……はい……あ、大丈夫ばい」

雫穂「あ！ あ！ あん！ は！ は！ はふ……くうん！ あ……」

雫穂「……は……は……はふ……あ、おしまいとキャン！！」

雫穂「ま、前もと……は、はい！ お願いし は！ は！」

雫穂「おっぱい……は！ いえ、胸ばそげん……重点的に はう！
あ！ あ！ あ！」

雫穂「はふう！ 指先で乳首こりこりつてああああ！ ひやう！
はふううう！ あああああ！」

雫穂「ひ、ひう！ お腹……あん！ はい……ありがとうごじやい
ます ひやん！ は！ は！ くふ！」

雫穂「あ！ あ！ あ！ 太ももしやわしやわしながら はふ！
ん！ 首筋にキス！ あ！ ひん！ ひやん！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ あは！ ああああ！ おっぱ
いそげん激しゅう！ あん！」

雫穂「ひ！」

雫穂「両手でえええへう！ 乳首こりこりつて あああああ！」

雫穂「手んひらで手んひらでえええ転がしやんで は！ は！ は

あああああ！ ひ！ ひう！ ひゃん！

雫穂「は！ は！ は！ ああああ！ おっぱいもみし抱きながら
嗚呼ああア！ 乳首！ 乳首そげんこすられたらあああああ！」

雫穂「はああああ！ や！ やん！ あう！ は！ は！ は！」

雫穂「や、や、やあああん！ 泡があ！ は！ ヌルヌルして気
持ちよかばいううん！！ あはああ！」

雫穂「は！ は！ お尻熱か！ あ！ おちんちんあたって！ ひ
やひやう！！ あ！ あ！ はん！」

雫穂「は！ お尻ん割れ目に！ やん！ こすられながら！ あ！
あ！ あ！ おっぱいもお尻も同時にいよかよか！ やああ！
あ！ あ！ あ！ あは！ や！ や！ は！ はああ！」

雫穂「気持ちよかー 気持ちよか！ はああ！ は！ あ！ あ！
あ！ はああ！ ！ んう！ 体中！ は！ 目茶苦茶にこす
られちよるばい！ はああ！ は！ は！ は！」

雫穂「ああ！ あ！ あ！ ああああ！ 火照ほてっちゃう！ あああ
火照ってちゃううううばい！ あああ！」

雫穂「ひん！ ひいん！ ひん！ ひいん！ あ！ ああふう！
あ！ あ！ あは！ あ！ あ！」

雫穂「あ、はふ！ は、はふ！ はん！ あはあ！ はああ！ は
あ！ はあ！ はあ！ はあ！」

雫穂「ほ、火照ってちゃうばい！！　い、い……いくう！！
あ！　あ！　は！」

雫穂「やああああ！　きやああああ！　ああああああ！！！」

雫穂「……は！　は！　は！　は！　……はふ……は！　は！
ふう……は……は……」

雫穂「……ん、ん……もう……こげんエッチなことしやれたん初めて
ばいーんー」

「……くちゅん！」

雫穂「もう……もう……温泉にきて身体冷やして風邪引いちや、馬
鹿みたいじゃないですかぁー」

雫穂「し、り、ま、せ、んー　もう……」

雫穂「……人が来ちゃいましたね……」

雫穂「……ん、はい」

雫穂「続きは温泉の中で……ちゅ」

雫穂「うふふ……いっちゃいましたね……」

雫穂「でも、親子だと思われちゃいました……もう……身体は隠していましたが……」

雫穂「ドキドキしちゃいました。おっぱいちゃんとお湯で隠れてたでしょうか？」

雫穂「頭だけお湯の上に出していたのでちよつとのぼせそうでした。えへへ」

雫穂「はあー ふふ、でもこうして肩を並べて温泉に入っているとー

雫穂「本当に家族にー 見えちゃうんですかね？」

雫穂「あ、自己紹介がまだでしたねー」

雫穂「私、雫石雫穂^{しずくいししずほ}。っていいますー」

雫穂「水もー したたるいい女って感じがしますよね？」

雫穂「お兄さんのー お名前は？」

雫穂「わー とっても素敵なお名前ですね」

雫穂「ん、ふー はあー

雫穂「ん、いいお湯ですね……はあ」

雫穂 「天然の温泉のぬるぬるが……うん、とっても気持ちいいです……はあ」

雫穂 「風が……気持ちいいです……ん……ふう……」

雫穂 「優しい木の匂い……素敵です……はふ……」

雫穂 「ん？」

雫穂 「えへへー どこ見てるんですか？」

雫穂 「この温泉……とっても澄んでますから……どこ見てるか丸わかりですよー」

雫穂 「……えへへ、私が見ている先も丸わかりですね……」

雫穂 「えへへ」

雫穂 「んー ちゅ」

雫穂 「はあ……ふう」

雫穂 「ん……ちゅちゅちゅ。ん。もうちよつと頭を下げてください……ん、ちゅちゅ」

雫穂 「はふ……れええちゅ……ちゅちゅ……ちゅん」

雫穂 「あむあむ……ちゅちゅ……ちゅちゅ」

雫穂「れえええ……れええええ……」

雫穂「へう」

雫穂「お嫌いですか？」

雫穂「えへへ、好きですよね……」

雫穂「おちんちんの膨らみ見てたら解ります」

雫穂「ちゆる……ちうちう……ちゅちゅ……ちううれええ……ちうちゅう」

雫穂「んぐちゆる……ちう、ちうちゅ」

雫穂「えへへ」

雫穂「耳たぶ舐めるの好きなんです……ちゅちう……グミみたいでちゆるちう……変ですか？」

雫穂「ん……はあ……ちうちゆる……ん。奥まで……舌を差し込んで……れえええちうちゆる」

雫穂「えへへ」

雫穂「おちんちんがびくってしてるの……よく見えます」

雫穂「はあ……ん、ちうちる……ちゅれえええ」

雫穂「ちゅちうちる……ちゅるちる」

雫穂「はあ……お体が硬くなってますよ……」

雫穂「はあ……ん……ちゅ……えへへ、ふとももさわっとしたただけでちうちゆる……んちうちゆる」

雫穂「はふ、びくってすごいです。ちゆりるちう……ちゅう……ん」

雫穂「はふ……お尻硬くなってます……ちうちゆるちう」

雫穂「ん……」

雫穂「ふ……は……ふ……」

雫穂「おちんちんさわっちゃる」

雫穂「ん……こしゅ！　こしゅ！　んちゅ、れええちう……ん、ちう……こしゅ！　こしゅ！……ちうちう……おちんちん、こしゅ！　こしゅ！　ちゅっ！」

雫穂「ちうちう……ちゆりう……しゅ、しゅ……はふ……ちうちうちゆる、おちんちん、こしゅ！　こしゅ！」

雫穂「素敵ばい……びくびくって」

雫穂「れええつちゆる……ちうへう……おちんちん、こしゅ　こしゅ！　おちんちんこしゅ！　こしゅ！」

雫穂「えへへ……ここん温泉、お湯がちよっとぬるぬるして……れえええちうちうちゆる」

雫穂「おちんちんばり、シコシコしやすか」

雫穂「はふ、おちんちん、こしゅ！　こしゅ！　ちゅ　おちんちん、こしゅ！　こしゅ！」

雫穂「はふ、れえええ……ちうちゆる……ちうちう……れえちゅる」

雫穂「一定のリズムで、こしゅ！　こしゅ！　ちう　こしゅ！　こしゅ！　ちゅ！　ちゅ」

雫穂「ちうちゅ　こしゅ！　こしゅ！　んれえ　こしゅ！　こしゅ！　ちゅ」

雫穂「突然早くしてやるばい」

雫穂「こしゅ！　こしゅ！　ちゅちう　こしゅ！　こしゅ！　れえ　こしゅ！　こしゅ！　ちうちう　こしゅ！　こしゅ！　ちゅつ　いちう　こしゅ！　こしゅ！　こしゅ！　こしゅ！　んちゅ！」

雫穂「またゅつくり」

雫穂「こしゅ……れええこしゅ……ちう……こしゅ……こしゅ！　ちうちゅ……ふふ、よかと？　よかとお？」

雫穂「れえええ……ちうちゆる……ちうちう……ちゅるれえ」

雫穂「じゅるちゅ　こしゅー　こしゅー　んふう　こしゅー　こしゅー　れえ……ちじゅる　こしゅ……　こしゅ……　ちうちう　こしゅー　こしゅー　ちゅついちう　こしゅー　こしゅー　はあ……ふう……　こしゅー　こしゅー　れえちゅ」

雫穂「はあ……はふ……はあ」

雫穂「たまたまも……指ではじいちやる」

雫穂「れえええ……しゅ、しゅ……ちうちゆりゅ、こしゅ！　こしゅ！　ん！」

雫穂「ちうつりゅ……ちゆるちうる……ちゅ、こしゅ！　こしゅ！　こしゅ！　ん！　はあ……　こしゅ！」

雫穂「はふ……はあ……ちうちゅちゅ」

雫穂「指でたまたまはじく度に……ちゅりう……れえええ……ん」

雫穂「身体全体震えよーと……解る　ちゅ」

雫穂「こしゅ！　こしゅ！　はふ　あむ　じゆる……こしゅ！　こしゅ！……はあ」

雫穂「れええ……ちうちゆる……れえええ　ん！ん！」

雫穂「ちうちう……ちゆるちう……れえええれええるちう」

雫穂「はい……れえええ……ちう……いつでん……んれええ」

雫穂「いってくれんね？　いってくれんね？！？　れええええ　しゅ！　しゅ！　しゅ！　ちうちゅ　しゅ！　しゅ！　しゅ！　しゅ！　しゅ！」

雫穂「……あ、温泉が汚れてしまうね……」

雫穂「ちゆるちゆる……じゃあ出すとき腰ば浮かしてくれん……んちつりゅちゆる」

雫穂「ん！ ん！ ん！ しゅ！ しゅ！ しゅ！ しゅ！ しゅ！ しゅ！ はあああ！」

雫穂「腰浮いてしもうたね、ん！」

雫穂「ちゆるちうちうれねええ……んふ！ ちゅちうり！ 口に……口に出してくれん！ れえええ！ ちゅちうじゆるちうちくん！ んつく！ んつく！ こく！ こく！ ん！ こく！」

雫穂「ちうちゆる……ちうつ……ちゆる……ん、口の中に……れえええ……ちゃんと出しえたね……れえええちう」

雫穂「ん……温泉を汚さないですみましたー ん！ ん！ ちう！ かふ！ ん！ じゆる！ ちうちうちゆる」

雫穂「ちゅう……はふ……すごい……全部出たと思ったのに……」

雫穂「危うく温泉汚しちやうところでした……」

雫穂「ん、ちよつと……顔についちやいましたね……ん……ちゅ」

雫穂「んふ……美味し」

雫穂「えへへ」

雫穂「はふー」

雫穂「なんだか……喉が渴いちゃいましたー」

雫穂「えへへ、ちよつとまっててくださいね」

雫穂「はい……ここの温泉の湧き水です」

雫穂「ガラスじゃなくてプラスチックのコップですよー えへへ、お代わり自由です」

雫穂「えへへ……美味しいですか？」

雫穂「ここへ来る前に調べておいたんです。私、自前のコップ持ち歩いているんですよー」

雫穂「んつくんつく……はふ、美味し」

雫穂「火照っちゃった身体に……ん、とっても美味し……」

雫穂「ん？ むー。えへへ……お兄さん……さっきからどこ見てるんですか？」

雫穂「こう見えてもー 形には自信があるんですよ？ おっぱい」

雫穂「こうやって……谷間を作ると……えへへ、ほら、温泉のお湯だってすくえちゃいます」

雫穂「どうしたんですかー お兄さんー じっとおっぱい見つめち

やってー」

雫穂「そんなにー顔を近づけて、はう！」

雫穂「あ、もう……ん……うん……私のおっぱいからは温泉は湧き出てませんよ、ひうん！」

雫穂「ん、ん、美味しいですか？ ん。はあ……」

雫穂「この温泉はとっても身体にいいですからねー はふ……あ、あ、ん」

雫穂「あ、もう……えへ……あは……ん！ うちんおっぱいん魅力に気がついたとー あ、あ……はふ」

雫穂「どうだー まいったかー えへ……ふう……はあ……はふう……」

雫穂「ひ！」

雫穂「ん、あ！ もう！ お兄しゃんったら！ はん！ はふ！ はふ！」

雫穂「ま、また火照ってしまいうようー」

雫穂「あ、は、はふ……あ、あん……は、は、はふ……ん」

雫穂「お兄しゃん……そげん乳首好きなんかー ひゃん！」

雫穂「ん、ん、ふう……は、はふ……は、は……はん」

雫穂「んー もうー」

雫穂「えへへー お兄しやんの温泉もー すってしまっうねー」

雫穂「んー ちゅー」

雫穂「れえええちうちゆる……ちうちうちう……ちゅちゅー」

雫穂「れえええちうちゅちゅ……ちうちう……ちうちうつる」

雫穂「えへへー お兄しやんの口から湧き水もろうてしまったー
ん、優しいキス」

雫穂「れええええ、えええ」

雫穂「ん……ちうちうちゅりー」

雫穂「今度はうちん湧き水飲んでくれんね？ れえええ、ええれ
えええちうちゅちゅる」

雫穂「あ、はふ……は、はふ……ちうちゅる……ちうー」

雫穂「ちゅちゅ……ちうちういちうー」

雫穂「はふ、素敵ー」

雫穂「ん、ちうちゅちうちう……あ、はふ。おっぱい揉みながら……
きす？ ちうちゅちうー」

雫穂「えへへ」

雫穂「うちんおっぱい好きっていつでもろうてうれしか。うちんうちん
うちん」

雫穂「ひゃん！」

雫穂「は、は……お尻も……ちうちゅちう」

雫穂「ん、もおう」

雫穂「また火照ってしまいうけん……ちうちゅちゅる」

雫穂「ん！ んん！ んんん！ あむ！ れえええちうちゅる」

雫穂「お兄しゃん！ 乳首こするん上手ん！ は！ ん！ ん！
んん！」

雫穂「こん温泉ヌルヌルやけんばり気持ちよかはうー」

雫穂「ん！ ちう ちゅう！ ちうちうれええ」

雫穂「お兄さん…… キス好きじゃ？ ちうちゅ ちゅる ちうち
う！」

雫穂「ちゅちゅちう！ ちうちう ちゅる ちう！ れえええへう
ちうちうる！」

雫穂「ん！ ん！ んちう！ はっ！」

雫穂「キス夢中になつとーよ……ちうじゆる……ちうちうちる……」

雫穂「もつと……ちう……ん……お兄しゃんの唾液……ん……れええええ飲ましえて……ちうちゆる」

雫穂「ちゅちゅちゅう……素敵ばい……素敵ばい……ちうつちゅう……ちうれええちうるちるつる」

雫穂「あはあ……キスう……ぱり火照るう……れえええちうちうちうれええ」

雫穂「ん　ん！　ん！　ちうちうれええちうじゆる！　ちうちれええじゆり！」

雫穂「は！　は！　ちうれええじゆる！　れうちゅちゅっ！　ちうちうれえ」

雫穂「お兄しゃんの唇、ぷにぷにして美味しあむはむちう！　れええじうじゆる」

雫穂「ん！　ちゅ！　ちゅ！　ちう！　れええろ！　じる　ちゆる！　ちゅうちゅっ！」

雫穂「キス気持ちよか！　ん！　ちうじゅ……　ぱり好き、ん！　ちうじゆる」

雫穂「ん、れう！　ちゅちう……んは……ちうじゆる……ちうれちう……ちゅちうちゅ！」

雫穂「ん！　ちうじゆる……　はあ！　気持ちよか！　ん！　ちゅ！
ちゅちゅうう！　ちうえろ！　じる　ちゆる！　ちゅちう
……」

雫穂「唾液もつと飲ましてれえちうちじゆる！」

雫穂「ん、んくっ！　ちゅちうじるちゆる……温泉と唾液が混じや
り合うて　うまかはむ！　じる……ちうちゅちう」

雫穂「ん！　ん！　ちうじるうちう……れえちう……ちゅりちう……
ちうちゅ……ちゅちゅ……ちゅ」

雫穂「は！……は！……は！……は！……あ……　お兄さんー　火照
つちやいますう」

雫穂「はあ……はあ……はふ……は……はあー」

雫穂「はあ……　……はあ……はあ……ん……」

雫穂「んー……」

雫穂「……」

雫穂「……最後まで……（耳元に吐息）して……」

雫穂「こつち……こつちです、はい……さっき水を汲んできたときに……物陰があつたんです。はい、早く来てください」

雫穂「え、ぐいぐい手を引つ張られると？ あ、痛かったですか、ごめんなさい……」

雫穂「私その……火照っちゃうと……ちよっと」

雫穂「もうー！ 興奮してるなんてはつきり言わないでくださいー」

雫穂「お兄さんのおちんちんさんもー」

雫穂「こんなに大きくして……ばか……」

雫穂「んしょ……んしょ……」

雫穂「ここです……はい、ここなら……大丈夫そうでしょ？」

雫穂「で、ど、どうします……や、やだー あはは、すると決めちやったら……そのふ、震えてきちゃって」

雫穂「あ、こ、こうですか？ 岩場にもたれて……」

雫穂「う、お尻を突き出すんですね……ちよ、ちよっとこの体勢はさすがに恥ずかしいですよー」

雫穂「う！ う！ うー！ そんなにお尻見ないでくださいようー
う！ う！ う！

雫穂「は、早くしてください……って、何言わせるんですきゃん！」

雫穂「あはああ！！ お尻……あはあ！！！！ 顔埋め^{うず}られて！」

雫穂「お尻ん割れめねぶられてしもうてますううう！ はああああ！
はあああああああ！」

雫穂「は！ は！ は！ お兄しゃん！ そげん事しゃるーと！
は！ は！ は！ んー！ うち初めてで！」

雫穂「あ！ は！ は！ あはっ！ あ！ はあああ！」

雫穂「ひうん！？」

雫穂「いえ！ イヤやなかばい！ ひゃん！ き、気持ちよか！
あう！ あう！ あう！ はうううう！」

雫穂「ひ、ひよかよかい！」

雫穂「よかよかい！ お兄しゃん！ お兄しゃん！ そこ！ お尻
ん穴ばい！ そこ舌ねじ込んじやあああ……あああん！ あは
っははああ！」

雫穂「やつつだあああ！ こげん所で！ はう！ はう！ はああ
ああ！ はああああ！！ やあああ！」

雫穂「あ！ はあああ！ はああ！ だめ！ だめええ！ だめえ
えええ！ はああああ！」

雫穂「え？ いや！ やめんでくれん！ やめんでくれんよう！
気持ちよかばいう！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ ひいいん！？！？」

雫穂「お尻すわれながらおっぱい！ はああああ！ ん！ うん！
揉まれちゃつとーよう！！ はふううううう！！！」

雫穂「あは！ ん！ かふ！ ……はああああ！ はああああ！
はふ！ はふ！ ひう！ ひやん！」

雫穂「あう！ あう！ あはう！ あう！ は！ あ！ あ！ あ！
はあ！」

雫穂「んー！！！？？」

雫穂「そこお！ めめしやん！ キスうう！ はあああああ！
はあああああああ！」

雫穂「あ！ あ！ あ！ あ！ はあああああ！」

雫穂「ずっと ずっとまっとなんばいよおおお！！！」

雫穂「んぐう！ きやう！ ひやん！ あはああああ！！ はああ
ああああ！！！」

雫穂「あああ…素敵…は！ は！ はあ！…素敵ばい…は！
は！ はあ！ はあああ！」

雫穂「火照りすぎてええええ おかしゆうなつてしまっー きやう

うううう！！」

雫穂「きやい ひう！！？」

雫穂「クリトリスうううう！ 舌ばいわれながら きやよかあ！
ひ！ ひ！ ひうん！ ひい！」

雫穂「また乳首いいよかよか！ ひ、よかん！ はああああん！
はあああああああ！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ はああ！ はああ！ はあああ
ああ！」

雫穂「は！ は！ は！ 火照ってしまいうううう！！ ああああ
ああ！！！！ はあああつあああ……」

雫穂「は、は、はふ……は……あ……は、きやい！？」

雫穂「や、やすましえて……きやあああああ！ そげん！ まだ
いっとーんに！ きやああん きやう！ きやう ふううう
ううう！！！！」

雫穂「んきやああああ！ 身体ー！ めちやくちやに気持ちようし
えんでえええ！！！！ は！ は！ は！ あは！ はああああ
あああ！！！！」

雫穂「今は本当に！ だめばい！ だめばい！ あはあ！ だめ！
はあああ！ おかしゅうなってしまうけん！ はああ 気
持ちよすぎてああああ おかしゅうなってしまうけん！ は！
は！ は！ あは！ はああ！ はあああ！」

雫穂「や、や、やあああ！ ん！ きやうきやう！ きゃん！ は
あああ！ はあああああ！」

雫穂「あ！ はあ！ はあ！ はっ！ はっ！ あう！ ん！ き
やあ！ はああああ！」

雫穂「んん……は……は……あゝ……あふ……は……」

雫穂「は……は……はふ……は……はふ……」

雫穂「は…… は…… は……」

雫穂「ひ、酷いですよ……び、びっくりして……その、ちよつと
怖かったですよう……」

雫穂「も、もう！ そんなニヤニヤしないでください！ 意地悪で
す！」

雫穂「そんな意地悪な人には……もうさせてあげませーん」

雫穂「………むー」

雫穂「……むー 本当ですかー？」

雫穂「優しく出来ますかー」

雫穂「……むー 信じられませーん」

雫穂「……何、後ろから抱きついているんですかー むー」

雫穂「いきなりい……奥まで！ あ！ は！ は！ つきすぎばい！
……は！ は！ はん！ はん！ あん！ ああん！ ああ
ん！」

雫穂「は……は、は……だめ……しゃつきんで敏感に……は、は！
は！ はん！」

雫穂「だ、大丈夫ばい！ 大丈夫ばいけどおお！！ ああああ！」

雫穂「気持ちよすぎて大丈夫じゃああああ！ はあああ！ なかで
うああああああ！」

雫穂「うー！ うー！ んー！ んふうううう！！！！！」

雫穂「お兄さんの中でええええ！！ 暴れてええ……堅かところが
ああああ はううううう！ 奥にあたつとーうううう！ は
ふううううう！」

雫穂「かき回しやるーとはあああ！ 奥でやだああああ！ はああ
ああ！ 気持ちよかううう！ はあああああ！」

雫穂「あ！ あ！ あ！ あ！ は！ はあん！ はん！ はああ！
はああ！ あ！ あ！ あ！ あ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ は！ あああ！ はああ！ はあ
ああ！ あ！ あ！ あ！ あああ！ はああ！」

雫穂「は！ は！ は！ は！ はあああ！ はああ！ はあ！
あ！ あ！ あ！ はああ！」

雫穂「す、素敵ばい……素敵ばい……うう！　は！　は！　は！
はああ！　は！　ああん！　あう！　あん！　あうん！」

雫穂「は……は……は……あゝ――　はあ……」

雫穂「？」

雫穂「どうしちゃったんですか？」

雫穂「……」

雫穂「終わっちゃったんですか？」

雫穂「……」

雫穂「やだやだ……もつと、もつとしてくださいよう！　気持ちよくしてくださいよう！　こんな所でやるなんて酷すぎますよ
うきやん！」

雫穂「んきやんきやあ！　きやう！　あはあああ！　あはん！　あ
ああ！　これえええ！　あー　これええええ！　素敵ばい素敵
ばい！　あはあああ！」

雫穂「き、き、気持ちよかよう！　中で！　中で！　あああ！　ば
り熱かばいううう！」

雫穂「あ！　あ！　は！　あ！　あ！　あ！　あ！　あ！　あ！
あ！　あ！」

雫穂「は！ は！ あ！ は！ は！ しゅき！ しゅてき！ は！
あ！ あ！ あ！ は！ は！ は！」

雫穂「は！ ああ！ お、お兄しゃんああ！ ああん！ あん！
は！ あ！ あ！ はう！ はう はうう！」

雫穂「色んなところに当たってえええええ！ ああ！ は！ はあ！
ん！ 感じすぎてしまうばい！ は！

雫穂「は！ は！ あ！ あは！ は！ は！ あ！ あ！ あ！
は！ は！ はあああ！」

雫穂「おっぱいいい！ さっきみたいに揉んでくだしやいきやああ
ああ！？ は！ は！ は！ あう！」

雫穂「ん！ 乳首こすってええ！ ひん！ ひいよか！ ひいいん！！
あはああああああ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！ はっ！ あ！ あは！ あは！
は！ は！ は！ は！」

雫穂「ん？ キス？ キスしたいとー？ きやつ！」

雫穂「ん！ ちゅ！ れえちう ちゅれえ！ ちうちう ちゅ！
んん！」

雫穂「は！ はっ！ チューしながら ん！ れちうじゆる！ お
っぱい揉まれとう！ れええちうじゆるちう！」

雫穂「ん！ んー！ ちうちうじゅり！ は！ は！ は！ ちう

ちう！ はあああ！ ちゅちうじる！ んー！ んんー！

雫穂「んー！ 頭の中真っ白になつとーよー！ ちうちうじる！
ちうちう！ は！ は！ ちゅうれえじる！ ん！ ん！」

雫穂「めめしやんおかしくなつて！ は！ あう！ ぎゅうぎゅう
に！ は！ は！ おちんちん放しやん！ くなつてえええ
は！ は！ は！ は！ はああ！ は！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！！！ は！！！ はあああああ！
はああああ！ はあああああ！」

雫穂「あ！ は！ は！ は！！！ はああ！！！ はあああ！
はああ！ はうううう！！！」

雫穂「も、もういったつちやよかか！？ いったつちやよかか！？？？
あああ！ きやんきやん！ きやああ！ はあああ！ はあ
あああ！！！」

雫穂「あ！ あ！ ああ！ お願よかい！！ 一緒にいこiiii！！
一緒にiiiiiiii！！！！ あ！ あ！ あ！ あ！」

雫穂「あう！ あう！ あう！ は！ は！ は！ あ！ あは！
はあ！！ はあ！！ はあ！ はあっ！！！！？」

雫穂「あああああ！ きやああああああ！！ きやあああああ！！
！」

雫穂「ん！ ん！ ん！ ん！ んん！！！！？ んー！！！！く
ふ……はあ……はあ……あ……」

雫穂「は……は……は……」

雫穂「は……は……はふ……はふ……はふう……」

雫穂「よかったあ……今度は……いってくれたんですねー」

雫穂「ちゃんと出てますよー　ん！　抜かないでえー　温泉に
たれちやいますー」

雫穂「はあ……ふ……は……はあ……は……」

雫穂「えへへ」

雫穂 「んー ちゅ」

雫穂 「ちうちうれえええろちう」

雫穂 「えへへ、だめですよー」

雫穂 「ちうじるちう……ちゆるちう」

雫穂 「ちうちる……じゆるちう」

雫穂 「もつと足を≡字に開いてー おちんちんー」

雫穂 「この温泉の上にさらけ出してくださいねー」

雫穂 「えへへ」

雫穂 「ちうちうじる……れええちうじゆる……れえう」

雫穂 「えへへ」

雫穂 「さつきは私にあんな恥ずかしいことー 好き勝手されたんですからー」

雫穂 「お・か・え・し」

雫穂 「んー れえええちう……じるちゆるちう」

雫穂 「ちゅちゅん……ちうちゆるちう」

雫穂「えへへ…好き勝手、恥ずかしい格好でー」

雫穂「ちうじるちゅうちゅちう…れえええ」

雫穂「敏感なところいじられる気分はどうですかあ？」

雫穂「れえええじるちゅうちう…れええちう」

雫穂「お兄さんのおちんちん…いつでも私が使えるように…れえちうじゆる」

雫穂「温泉にーれえええ…ちゅっ！飾っておきたいです。ちうちうれえええ…」

雫穂「れええちうじゆる…ちうちうれええちゅう」

雫穂「腰がびくんびくんしてますよ？れえええちるちう」

雫穂「ちゅちゅちう…ちうちゅじゆる」

雫穂「ん？いったばかりだから？きつい？だめでーす」

雫穂「えへへ」

雫穂「先端をこう…ちゅう！唇で挟んでちうれええ！思いつきり吸い込んであげまーすれえええじゆるじゅぼじゆる！」

雫穂「ん！ん！ん！んふう？

雫穂「だめでーす。根元を押さえていかせませーん」

雫穂「えへへ」

雫穂「ちゅうじるれえちう……れえええちうちうじゆる」

雫穂「じゆるちうちうれええ……ちじゆるい……ちうちう」

雫穂「いきたい？　いきたい？　いきたいですか？」

雫穂「だめでーす」

雫穂「えへへ」

雫穂「れええじるちゅいちゅぽん！　ちうちうちゆるり！」

雫穂「ちうちうれええ　じゆるちうじゆる　ちゅうる！」

雫穂「んふ、れええ……ちう……んちゅ……ちゅちゅちう」

雫穂「んー？　ほんとにー？」

雫穂「ほんとうに反省してますかー？」

雫穂「……じゃあいかせてあげます」

雫穂「じゆるじゆるじゅぽちうちうれええ！　じゆるじゆるじゆる！」

雫穂「じゆるちうれええちう！　じゅぽじゆるちう！　れええちうちうちう」

雫穂「んん！？　ん！　ん！　んつく！　んつく　ん！　こく！
こくっ！　ごくっ！」

雫穂「ん……ちゅ……んちゅ……ちうちう……れえちうはふ……は
むちう」

雫穂「はふ……は……はあ……ふう……温泉を汚さずにちゃんとお
口に出せましたねー　でも、私の顔まで飛び散るなんて……」

雫穂「まだまだとっても元気ばい！」

指ですくい舐め取る

雫穂「ん、美味し……」

雫穂「はあ……お天道様はまだ昇ったまま……」

雫穂「絶好の温泉日和ですねー」

雫穂「えへへ」